ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.2 February 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

CONTENTS

・巻頭言
信仰を翻訳する
／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」（11）
明治 21 年 5 月
／深谷 耕治 2

・音のちから―中国古代の人と音楽（18）
出土楽器が語る音の世界―琴―
／中 純子 3

・ヴァチカン便り（66）
ヴァチカンの年末
／山口 英雄 4

・天理参考館から（34）
辰年の竜骨車
／幡鎌 真理 5

・2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（9）
第 5 講：165「高う買うて」
／島田 勝巳 6

・2023 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（9）
第 6 講：113「子守歌」
／堀内 みどり 7

・おやさと研究所ニュース 8

2023 年度おやさと研究所 特別講座「教学と現代」／ 2023 年度公開教学講座のご案内／ 2024 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

信仰を翻訳する

おやさと研究所長 井上昭洋 *Akihiro Inoue*

私は天理教教会本部に籍を置いているので、毎月、神殿と教祖殿の当番に入る。いずれの当番であっても、結界内で着座して奉仕当番を務めるわけだが、奉仕中は参拝者の方々の礼拝の姿を当然のことながら目にすることになる。神殿と教祖殿とでは、参拝者の礼拝する様子は異なる。神殿では、あらゆる方角からかんろだいを拝することができ、信者は思い思いの場所に座って、座りづとめをする。教祖殿では、合殿と御用場のいずれからでも礼拝することができるが、合殿で教祖の御前にて拝するのと、御用場から拝するのとでは、参拝者の心持ちに違いがあるようだ。それは拝をしている時間の長さにも表れる。御用場ではおさづけを取り次いでいる様子をしばしば目にするが、まれに座りづとめをしようとする人がいる。正面中央の大きなお社を見て思わず手を振ってしまうのかもしれない。そのような時には境内掛が駆け寄って、座りづとめは神殿でするようにと促す。

礼拝に来る人は必ずしも信者とは限らない。知り合いの信者に誘われて訪れる人や社会見学の一環で訪れる人もいる。いずれにせよ引率者は、神殿であれば「ぢば・かんろだい」の意味について解説する。この世の始まりに親神が人間を宿し込んだ地点を「ぢば」と呼び、そのぢばに親神が鎮まっていること。その地点に「かんろだい」が据えられて、礼拝の目標（めどう）となっていること。さらに、「ぢば・かんろだい」を囲んで勤められる「かぐらづとめ」について紹介すれば、天理教の聖地であるぢばについての一通りの説明になるだろう。

一方、教祖殿であれば「存命の教祖」について解説することになる。教祖は明治 20 年陰暦正月二十六日に現身を隠したが、今もなお存命のまま働いていることについて説明し、教祖殿では掛の方が存命の教祖にお仕えしていることも合わせて述べることになるだろう。ある時、合殿結界内で奉仕していると、未信者と思しき人を連れてきたハッピ姿の青年が教祖と教祖殿について説明している姿が目に止まった。それとはなしにその説明に耳を傾けていると「教祖は存命であるということになっている」という彼の言葉が聞こえてきた。その言い回しは私の耳に妙に引っかかり、やまびこのようにこだましたのだった。

教祖が存命であることは天理教を信仰する者にとって絶対的な真理である。しかしながら、信仰者にとってのこの真理を未信者に説明する時に、未信者に分かるようにその真理を翻訳する必要が生じる。翻訳においては、その言語・文化を解さない相手の側に立って、相手側の視点からアプローチし、意訳する必要が出てくる。「ということになっている」という文言もそのような思いから発せられたのだろう。未信者ににおいがけをしておぢばに連れて帰ってくるぐらいなので、この青年が確固たる信仰を持っていることは明白だ。相手の側に立って中立的かつ客観的に説明しようとして「ということになっている」という言い回しになったのだと思う。そこに他意はなかったに違いない。なにより彼自身がこの言い回しに自分の信仰を否定しているかのような居心地の悪さを感じていたはずだ。

「教祖は存命である」と言い切ってしまっては、この真理の丁寧な翻訳にはならない。彼は「（私達は）存命であると信じている」と言うべきだったのか、「存命であると教えられる」と言うべきだったのか。それとも半ば確信犯的に「教祖は存命だ」と宣言すべきだったのか。そのようなことに思いを巡らせながら、信仰者自身が「ということになっている」というレベルに近いところで教祖存命の理を捉えてしまうようなことはないか？とうつらうつらとしながら自問したのだった。

明治21年5月

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

明治21年4月10日、東京に仮本部を置いたかたちで「神道直轄天理教会」が公認された。公認を得ていなかったために、おぢばでは巡査がお屋敷の門前に立っていた。初代真柱が不在の中、おぢばで留守を守る増野正兵衛たちにとっても、公認は大きな出来事であっただろう。本部設置に際して、正兵衛は「会計兼派出」として名を連ねている。この頃の増野家の「おさしづ」を見ていきたい。

- 明治21年5月6日（陰暦3月26日）午前8時：増野正兵衛伺（四日前より左の歯浮き、陰暦二十四日夜より俄に寒気して縛られる様になり、一度願い、速におたすけを頂き、それより何となく身しんどうてならず、二十五日十二時よりおぢばへ出でおたすけを頂き、それより又目かい口のはたへ出物出たるに付伺）
- 5月8日（陰暦3月28日）夜：増野正兵衛前さしづにより、所々御話を伝えに出るには、播州地方へも参りまして宜しきや伺／同日同夜、増野正兵衛口端出物喉痛みに付伺
- 5月21日午後4時：増野正兵衛身上播州より帰りての願
- 5月22日（陰暦4月12日）：増野正兵衛鼻の奥、左胸腹の下出物出来、胸むかつき気分悪しく身上障りに付伺
- 5月23日（陰暦4月13日）：中山会長初め諸取次方より東京本部へ行ってくれとの事に付、増野正兵衛東京行伺
- 5月24日：増野正兵衛おぢば出発の伺／本席龍田村まで御送り伺／同桝井伊三郎本席御供見送り願

明治21年5月6日、増野正兵衛は、自身の身の障りについて伺っている。割書きを見ると症状は複合的であり、歯が浮いたり、身体がしんどくなったり、また目の痒みや口に出来物が出るようになった。「軽い道、何でもない道修理肥道、神一条一つ話、長らく一寸通り難（に）くい道を連れて通る」と、世間から見ると通ることが難しいような神一条の道を、それでもやはり通るようにと諭されている。口の障りについては、3カ月前の2月21日にも伺っており、家内の状況に対して「実りある日を楽しみに真実の種を蒔くように」と諭されていた。どちらの「おさしづ」にも「世上」や「世界の道」という言葉が多く、家内の者たちが神一条の道よりも世界の道を立てている状況を述べていると考えられる。

その2日後の5月8日、巡査が平服で「神の道」を質問しに来た。その後「おさしづ」を伺うと、「近くから話聞きたい者へは諭してやるがよい。遙々運んでやるがよい」というお言葉があり、それを受けて正兵衛は、その夜に「所々御話を伝えに出るには、播州地方へも参りまして宜しきや」と伺っている。「どんな事も急（せ）えてはいかん、時々旬々道」というお言葉があり、まずは身の周りの者から神の話を十分聞き分けるように諭されている。その後、同じ夜に、口の周りの出来物と喉の痛みについて再び伺うと、「案じる事は要らん。たゞ世界処、それ〳〵早く理を治めくれるよう〳〵」と説かれている。「理を治める」とは、神一条の道に踏み出し切れない家内の事情のことについて言われているのであろう。

正兵衛は、それからしばらく播州（神戸地方）に戻っていたが、2週間ほど経った5月21日、身上の障りがひどくなったのか、おぢばに帰ってきて「おさしづ」を仰いでいる。まず「身上に一つ障りあり、先々は治まりてある」と、将来の治まりについてふれられた後、「世界の道は通り、通り難くい神の道は内、表と裏との道である。内に運ぶ人が少のうてならん。これをよく、世上にやないで、心に定めてくれねばならん」と諭されている。5月6日の「おさしづ」と表現は異なるものの、言わんとすることはほぼ同じといえよう。

次の日（5月22日）、正兵衛は、今度は「鼻の奥、左胸腹の下」の出来物と、「胸むかつき気分悪しく」について神意を伺った。「さあ先々勤め、内々一つ事情、いかなる話、先々という処、安心皆安心定め」と、先々のことをよく考えて、みんなが「安心」できるよう心を定めるようにと諭されている。

この頃、正兵衛は、初代真柱から交替として東京の仮本部に行くようにと命を受けていた。伺うと「さあ〳〵当分処々々々あちら勤め、互い〳〵の勤めやい」と許された。東京出発に際して「替わり入れ替わり、心置き無（の）う、安心心定（こころさだ）め、内々安心、潔（いさ）ぎよう速やかの心定め」と、東京に行くことと内々の「安心」について述べられている。正兵衛は、家内のことが気にかかっていたのだろう。東京行きについて「潔ぎよう速やかの心定め」という言葉が印象的である。割書きを見ると、本席が龍田村まで見送りに来たようである。

「鼻」「胸」

さて、5月22日の「おさしづ」は、『身上さとし』では「鼻」と「胸」の二つの項目で用いられている。まず「鼻」では「先案じせず、家内の者が皆安心して、お道の上につとめる心を定めよという意味で、鼻の奥の障りは、先案じをしてはならぬと指示されたのであろう[(1)]」と述べられており、また、「胸」では「これから将来安心である。家内の者皆安心せよ。どういう処に移転するのも天の理と納得がついたら、懸案の事を親神様が治めるであろう。という意味で、胸のむかつくのは、理をよく納得せよということを指示されたのであろう[(2)]」と記されている。

このように『身上さとし』の類型的な説明としては「鼻＝先案じしないように」、「胸＝理をよく納得せよ」という指示として捉えられているが、増野家の文脈でいえば（「口」も含めて）おぢば移転に向けた家内の者の心定めについて言われていると考えられる。特に、神戸という繁華な町で世上に流されやすい中、神一条の道に踏み出し、「先々を見据えた安心」を持つことが肝要といえる。

［註］

（1）深谷忠政『教理研究身上さとし―おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、84頁。

（2）同書、153頁。

音のちから―中国古代の人と音楽（18）

出土楽器が語る音の世界―琴（きん）―

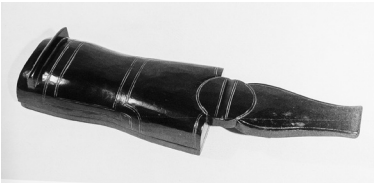
天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

古が冠された楽器

琴（きん）は、古代から奏された絃楽器であり、かの孔子も学んだとされ（『孔子家語』巻８弁楽解）、中国の伝統楽器の筆頭にあげられる。それはたとえ新品でも「古琴」と呼ばれることもある。伝統楽器で「古」を付けて詩篇に詠じられたものは他には「古瑟」くらいであり、「古琵琶」・「古箜篌」はもちろん「古笛」・「古箏」・「古簫」・「古鼓」という語もほとんど使われていない。その理由を筆者なりに考えてみると、唐代の白居易の詩篇に至る。「古琴には世俗の好む調べが無く、演奏が終わってみると誰も聴いているものがいない（古琴無俗韻、奏罷無人聴）」（「鄧魴張徹落第」）や、「人の情は往々にして今を重んじ古を疎んじる、古琴に絃が張ってあっても誰も弾こうとしない（人情重今多賤古、古琴有絃人不撫）」（「五絃弾」）など、新しい楽器を好む人々には、古い楽器である琴は好まれず、廃れていく。その最たるものが「廃琴」という詩で詠じられた「糸と桐とで造られた琴は、中に太古の声を秘めている、太古の声は淡くて無味なもので、今の人の気持ちにはそぐわない（絲桐合為琴、中有太古声、古声淡無味、不称今人情）」であろう。「新」に飛びついて、「古」を疎んじるのを戒める白居易の諷諫（ふうかん）が、古と「琴」を結び付ける契機の一つであろう。

琴はいつから七絃なのか

琴はいま「七絃琴」とも呼ばれている。しかし、『史記』巻24「楽書二」に、「舜は五絃の琴を弾き、南風の詩を歌う」とあるので、かの伯牙が弾いたのは五絃の琴だったのかと思いながら出土物をみると、現在一番古いものは、戦国早期の曾侯乙墓から出土した下図の十絃琴（『中国音楽史図鑑』人民音楽出版社 1988 年 22 頁）だと言われている。



琴は、最初から七絃だったのではなく、あとあと七絃に確定されたと考えられる。『太平御覧』巻 577 に引く漢代の『風俗通義』に、「いま琴の長さが四尺五寸なのは四時と五行に則しており、七絃なのは七星に則している（今琴長四尺五寸者法四時五行、七絃者法七星）」とあるので、漢代には七絃となっていたらしい。前漢の馬王堆からは七絃琴が出土していることもそれを裏付ける。さらに、六朝になると大体現在の琴と同じように奏されていたのではないかといわれている（秦序主編『六朝音楽文化研究』文化芸術出版社 2009 年 295 頁）。それは、竹林の七賢の一人として有名な嵇康（けいこう）（223 ～ 262）等が奏でた弾琴図（『中国音楽史図鑑』58 頁）に演奏時の左手の位置の目安となる徽（き）といわれる目印がみえるからである。嵇康は『文選』に収められた「琴賦」の作者でもある。「和静なる琴の徳は、計り知れない。その形は清らかでその心は俗界から遠く、それを明らかにすることは難しい（愔愔琴徳、不可測兮。体清心遠、邈難極兮）」、「美しい音の繁（しげ）きさまは、すべての音楽に冠たるものだ。しかし世に音を知るものは稀で、琴を珍重するものはいない（紛綸翕響、冠衆藝兮。識音者希、誰能珍兮）」。琴の素晴らしさを述べ、俗世にはそれを知るものがないと嘆く「琴賦」は、以降の琴のあり方を方向づけた。

唐代の琴文化

嵇康が嘆き、白居易が諫（いさ）めたが、実は「古琴」は人が顧みない楽器とはなっていなかった。宋代以降、文人の嗜（たしな）みとして「琴棋書画」という芸術分野の素養が求められるなかで、「琴」はその音楽的教養を象徴するものとされた。中国山水画のなかでも、琴を童子に持たせて山中に遊ぶ隠者が描かれていることも、琴という楽器が俗世間から離れた境地に誘うアイテムとなっていることが窺える。唐代の事情を記す『唐国史補』には、数百張の琴を作成して、求めるものに与えた李汧（りけん）という者のことや、長安では樊氏や路氏の琴が第一とされているとか、蜀の雷氏の琴が有名で、先ほども述べた目印の徽の部分が「玉」「瑟瑟（碧色の宝石）」「金」「螺蚌（貝殻）」で作られているといった情報がみえる。また、晩唐の『楽府雑録』には、以下のようにある。

> 古くから琴の名手はたしかに多かった。貞元年間（785 ～ 805）には、成都の雷生が琴制作に巧みで、現在でもなお子孫がおり、その技術をたもっていて、その精妙さは天下に類するものがなく、雷氏の琴を弾く者も多い。太和年間（827 ～ 835）には賀若夷が琴の演奏に秀で、後に待詔（皇帝の傍に仕え、その詔命を待つ立場のもの）となって、文宗の御前において、ある曲調を奏でた。文宗はとてもお褒めになり、朱衣を賜った。現在でもこの調子を賜緋調と呼んでいる。（古者能士固多矣。貞元中成都雷生善斲琴、至今尚有孫息、不墜其業、精妙天下無比也、弾者亦衆焉。太和中有賀若夷尤能、後為待詔、対文宗弾一調。上嘉賞之、仍賜朱衣。至今為賜緋調）

雷氏制作という有名ブランドが多く用いられ、琴を皇帝の御前で弾いて褒美をもらうなどという逸話からは、先に見た白居易「廃琴」において、琴がまったく人々の興味を惹かなくなり見向きもされないというのが、古を捨てて新を尊ぶありかたへの諷諫を意図した詩的誇張であることが理解される。

正倉院の唐琴は日本製だった

唐代の「金銀平文琴」が正倉院に残っているとされてきた。『正倉院美術館』（講談社 2009 年 152 頁）にも下の写真とともに「唐代の遺作として貴重」と書かれている。

しかしながら、長年北京の故宮博物院に研究員として勤務し、古琴の鑑定における第一人者として知られ、何張もの唐琴を実見した鄭珉中氏により、それは日本で作られたものであることが立証された。氏はその形状・構造・髹漆（きゅうしつ）工芸・銘文・装飾などあらゆる視点から精査した。詳しくは山寺美紀子・山寺三知「鄭珉中著正倉院『金銀平文琴』について」その１・２（『日本伝統音楽研究』第 14・16 号 2017・2019 年）に譲りたい。金銀の薄板を文様に切り、黒漆塗り表面の全面に貼り付け、さらにその上から漆を塗り重ねて研ぎ出したこの琴が、実は日本製作であったとすれば、日本の高度な工芸技術が示されたことになろう。しかしこの琴は装飾が邪魔をして実用には不向きであったと思われる。日本人にとってそれは唐土の音楽文化に対する憧憬の象徴だったのかもしれない。

ヴァチカン便り（66）

ヴァチカンの年末

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

ベッチュー枢機卿に５年６カ月の刑が確定

2023 年 12 月 16 日、ヴァチカンの法廷で、ベッチュー前枢機卿（75 歳）を裁く公判が開かれた。ヴァチカンにおける彼の犯罪については以前に公表されているが、その裁判は 29 カ月かかり、口頭弁論は 86 回も行われたのである。そしてこの日、最終公判が開かれ、ヴァチカン裁判所のジュゼッペ・ピンニャ・トーネ裁判長の下で 4 時間半にわたる審議が行われた。その時間、検察側も弁護側も口角泡を飛ばし喧々諤々の討議を行った。最終的には、裁判長はベッチュー枢機卿に対して 5 年 6 カ月の懲役刑を宣告した。さらに、公金横領罪、詐欺罪、聖務停止のほか、8 万ユーロの罰金が課せられた。多くの人々、とりわけ無罪を信じていたベッチューの弁護団はこの判定に衝撃を受けた。フランチェスコ法王は裁判の結果に満足し、枢機卿たちの権力の弱体化を喜んでいるようだ。ヴァチカン内での財政スキャンダルは、今まで長い間、公にされることはなかった。歴史的に見れば、アンブロシウスの時代（紀元 4 世紀）にヴァチカンの金融スキャンダルがあったことが知られている。法王はヴァチカン内部のスキャンダルが、ヴァチカンの内部の自浄能力で解決したことに満足している。

法王は自分の墓を確保

フランチェスコ法王は旧年 11 月より 12 月にかけて体調を崩し、毎日曜日に行われるアンジェルスの祈りの際に話もできない状態になった。そこで、代理人にアンジェルスの原稿を読ませることもあった。前法王ベネディクト 16 世（ラッツィンガー元枢機卿）に続いて、フランチェスコも法王を辞任するのではないかという噂が流れたが、法王は少し呼吸困難に陥っただけであった。現在、病状は回復して辞任の話は消えてしまった。法王にも辞任の気持ちは一切ないようだ。

法王は 12 月 17 日に満 87 歳を迎えた。17 日の一般謁見の始まる前に、子供たちに囲まれた法王は、ケーキの上に据えられた 87 を示すシンボルの明かりを吹き消した。法王はこの機会に、すでに自分の墓を準備したことを明らかにした。その場所は、ローマのサンタマリア・マジョーレ教会の中だ。現法王は、法王に決まった直後にもこの教会を訪れ、感謝の祈りを捧げていた。なお、法王への祝電はイタリアのマッタレッラ大統領やジョルジャ・メローニ首相からも届いた。

同性愛者のカップルも教会で祝福を受けられる

翌 12 月 18 日、法王は、同性愛者のカップルも祝福を教会で受けられると公表した。法王は次のように述べた。「主はだれも非難しない。主は腕を広げて歓迎しているのです。教会の扉は閉じていない。教会の中には誰でも席があるのです」と。

もともと、結婚による祝福と同性愛者が教会で祝福を受けることとの間には大きな相違があり、両者の混同は避けなければならない。それほどまでに結婚に際しての祝福の儀式は絶対的なものなので、この変化は大変なものだったのだ。3 年前の 2021 年 2 月 22 日までは、教理上は完全に「ノー」であった。ルイス・ラグリア枢機卿によれば、同性愛者への祝福は絶対に排除されるべきだと言っていた。しかし、北ヨーロッパでは様子が違っていた。2022 年から LGBTQ の人たちにも神の祝福を与えてきた。ドイツでの司教会議では、司教たちに向けて、1 日も早く教会を LGBTQ の人たちに解放し、祝福を与えることを実施しようと訴えているのである。

子供たちの質問に答える

フランチェスコ法王は体調が良くなかった 2023 年 11 月初旬の時期でも、子供たちの前に現れ、様々な質問に答えていた。11 月 6 日には、世界 84 カ国から 7,500 人の子供たちが集まった。日常的に報道される戦争に関する出来事の質問が多かった。シリアのアントラニック少年は、なぜ戦争の時、罪のない子供たちが殺されるのか、またさらに大人はなぜ子供を守らないのかと問いかけた。法王は一瞬絶句したものの、「まず亡くなった子供たちの冥福を皆で祈りましょう」と提案した。そして、「戦争の時、なぜ子供たちが殺されるのですか」と同じ言葉を 3 度繰り返したのだ。

前法王のゲンスヴァイン秘書：現法王と面会

ゲンスヴァインは、前法王ベネディクト 16 世の秘書として、また名誉法王の世話役として、2022 年 12 月 31 日に亡くなるまで側に仕えていた。2023 年 12 月 31 日の一般謁見に前法王の 1 周忌が開かれ、元秘書だったゲンスヴァインも招待され、その謁見に出席した。前法王の死後、ゲンスヴァインはヴァチカンに残って仕事を続けると思われたが、現法王によって、ドイツのフライブルクに大司教として派遣された。しかし、前法王が考えていた役職は与えられず、ヴァチカンに対しては何の権限もない一介の大司教になっただけである。彼は大司教の役割を大過なくこなしているものの、ヴァチカンに対して有効な働きができないことを悩んでおり、早くヴァチカンでの要職を与えてくれるように望んでいる。

ズッピ枢機卿の記者会見

最近、ウクライナ紛争の調停役に任命されたズッピ枢機卿の記者会見が行われた。その一問一答より。

（問）ご両親についてお聞かせください。

（答）私の父は信仰深い人でした。子供には、ヨハネ、ルカ、マルコと福音史家の名前をつけ、私はマテオ（マタイ）と名付けられました。末っ子にはもう福音史家の名前もなく、パオロと名付けました。

（問）お母様はコンフォロニエリ枢機卿の姪になるのですね。

（答）私たち子供は小さい時、ヴァチカンに行った時にはコンフォロニエリ枢機卿の前に跪き、彼の指輪に接吻したものでした。私はカソリックの教えに従いました。1971 年、私は 22 歳の時でしたが、聖エジディオ共同体の創始者アンドレア・リッカルドと出会い、これに入会しました。昔は 100 メートルも歩けば、そこに神父がいたものです。今、若者は 12、3 歳の頃に堅信式をすますと、多くが教会から離れてしまいます。

（問）法王はあなたをウクライナ紛争の調停役に任命しましたが・・・。

（答）私はとにかく動かねばならないと思いました。そこで、キーウ、モスクワ、またアメリカ、中国を訪問しました。紛争に直接・間接に関係ある人々と出会い、意見を交換しました。皆平和を望んでいるのです。平和を獲得するチャンスを逃してはなりません。アフリカのモザンビークの平和活動が評価されますが、それとは事情が違うのです。戦争の原因が 100 あれば、解決方法も 100 あると思います。私たちはいつもイエスと一緒です。イエスがいれば、全てが平和的に治まるのです。私たちは罪を負っていますが、神の子であり、相互に愛の心を抱いているのです。

辰年の竜骨車

天理参考館学芸員
幡鎌　真理 *Mari Hatakama*

2024年は甲辰（きのえたつ）の年に当たる。干支のなかで龍（辰）だけが架空の生きものだ。龍は水や海の神とされ、竜巻や雷などの自然現象を起こす、良くも悪くも大自然の躍動を象徴するものだ。古来、わが国が多大な影響を受けている中国では、龍は最も神聖な霊獣であり、殷代（B.C.17世紀～B.C.1046）の甲骨文字に既に「龍」の文字を見ることができる。周代（B.C.1046～B.C.256）には龍は雷雨の神とみなされるようになり、雨乞いで祀られる。漢代（B.C.206～A.D.8）以降には皇帝は龍によって生まれたとする皇帝龍生説が起こり、龍の文様は皇帝の独占で、一般の使用が禁じられた。一方、西洋では龍に相当するのがドラゴンで、こちらは悪魔の使いである。ドラゴンは水に関係するというよりも、翼がある空飛ぶ爬虫類のような形状をしている。東西の認識、文化の違いがここにも現れていて興味深い。

東アジア地域の一員である日本は、当然ながら龍神（水神）信仰である。毎年、全国の主要博物館がメンバーになっているインターネットミュージアム（I.M.）でミュージアム干支コレクションアワードが開催され、各館自慢のその年の干支関連資料がエントリーされる。竹内栖鳳が20代初めに描いた迫力のある「雲龍」（京都市京セラ美術館）、天下三名槍の一つで刃に倶利伽羅龍が彫刻された「日本号」（福岡市博物館）、佐賀藩主・侯爵鍋島家に伝わる、胴体や手足が自在に動く龍の置物（徴古館）など、錚々たる逸品が揃うなか、わが天理参考館が満を持して送り込もうとしたのが竜骨車である。竜骨車とは農具のひとつで、木製の揚水機のことをいう。「なぜ農具を？」という声が聞こえてきそうだが、ゆめゆめ侮ることなかれ。これは実に貴重な逸品で、江戸時代に発明された農具にも関わらず、現存するのは全国で30台ほどしかない。しかも当館蔵品は状態がすこぶる良好な美品で、ウィキペディアの「竜骨車」の説明に展示画像が使われているほどである。残念ながら応募期間が短く、今回のエントリーは見送りとなった。ぜひ２階展示室で実物をご覧いただきたい。

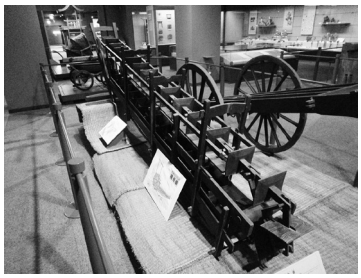


図１　竜骨車　滋賀　全長368.0cm
羽33枚のうち、１枚欠失するのみ。
〈天理参考館蔵〉

水田稲作農業を主体とするわが国の農業にあっては、灌漑用水は最重要案件である。兼業農家であった元職員の言によると、「施肥や農薬の散布も重要だが、栽培上最も管理が必要となるのは水だ。水田に常に水があれば稲は育つというのは間違いで、時に応じて水を出し入れしなければならない」のだそうである。歴史的に見ても、古代には池や溝の構築、中世では用水路の開発や用水の配分、近世になると各地で治水工事がなされて用水路灌漑による耕地の開発が進んだ。水をめぐって争いも頻発する。中世ですでに見られた淀川や宇治川の水車のように、水が流れている場所で自然に回転させて、水を田に注ぎ入れることができない場所の耕地化も江戸時代には拡大した。そうなると、低い場所の水源から、高いところにある水田に水を引き揚げる道具が必要になる。揚水機としては、局地的に使われていた竜骨車が、農業先進地帯であった近畿を中心に普及し、宝暦・安永頃までさかんに使われた。竜骨車自体は中国からの伝来で、一尺余りの軽く丈夫な板でつくった水槽状のいれものを継ぎ合わせ、下部を水中につけて水を掻き上げて順次上部に送る仕組みになっている。キャタピラの形状で、水を汲み上げるときに龍の背骨が波打つように見えることから、その名が付いたのだろう。上部に送る動力は人で、２人が上部の車輪を踏んだりハンドルを回すことで回転させるのである。元禄３年（1690）刊の『人倫訓蒙図彙（じんりんきんもうずい）』に「民間にこれを求めて田の流れを仕懸（しかか）る也。大坂天神橋の西又四郎これをつくる」と記しており、わざわざ製作者の名前をあげているほど特殊な技術を有する職人が必要だったと考えられる。そのため生産数も少なく、それに応じて価格も高く、構造が複雑なためにこわれやすかった。結果的に、一部の富裕な農民しか保有することができない。元禄、享保と益々耕地開発が進行して、揚水機の需要が増してくると、簡便な踏車がその座を奪った。踏車は中世の水車のように流れを利用して自然に回転するものではなく、人が水車の羽に乗って足を交互に踏み下して車を回すことで下の水をすくい上げ、その水が板でつくった枠を水路にして高いところに送り込まれる仕組みになっている。寛文年間にはじめてつくられた。かなり高所でも２段、３段と踏車を据えると大量に揚水することができる。

西日本では電力揚水がおこなわれるようになったつい最近、大正時代から昭和時代まで現役だった。ただ大変な労力を必要とし、現代のスポーツジムのマシンにある自転車こぎやステッパー運動と全く同じ動作である。これを暑い夏の日差しの下で、一日中黙々と続けていた昔の人の労働量に頭が下がる。なるほど水を扱うことは、龍を御する如く、身を挺することなのかもしれない。どうぞ今年も龍が暴れず、安寧な世となることを願ってやまない。

図２　踏車　奈良　明治27年　全長224.0cm
「郡山新町大阪屋栄治」銘。〈天理参考館蔵〉
羽15枚。水車部分の径148cm。

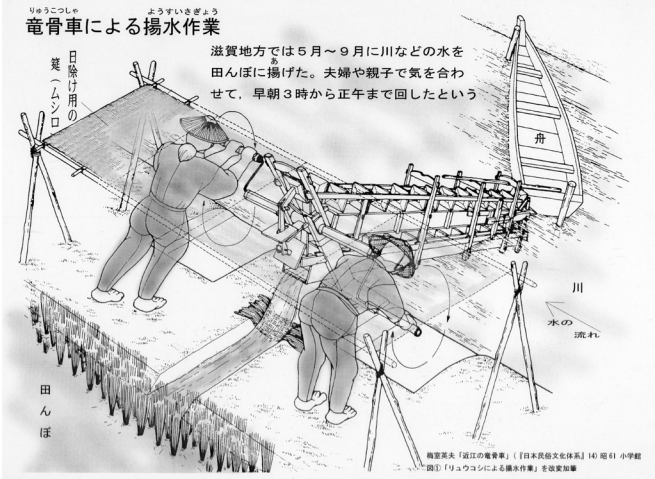


図３　竜骨車による揚水作業図解〈天理参考館蔵〉

第５講：165「高う買うて」

天理大学人間学部教授
おやさと研究所兼任研究員
島田　勝巳　*Katsumi Shimada*

1．「大阪商人」とその人間関係の特徴

この逸話を読むうえでまずおさえておきたいのは、商人という職能集団に対する教祖の眼差しである。「商売人はなあ、高う買うて、安う売るのやで。」というお言葉は、逸話篇 104「信心はな」にも見られる。そこでは、後に兵神真明組の講元になる冨田伝次郎に対し、教祖はまず彼が蒟蒻屋であることを確認されたうえで、先のお言葉を伝えられている。一方、この逸話「高う買うて」に登場する宮田善蔵も同じく真明組につながる商売人であった。商人に対する教祖の視点は、農民を主体とする当時の大和の国とは異なる、商いや流通で賑わう大阪の繁華なイメージとも結びついたものであったと考えられる。

ところで、歴史家の武光誠は、江戸時代の経済発展を支えた存在として「大阪商人」を挙げ、その特徴として、正直を旨とし、取引相手に喜んでもらえるような商いをすることを心がけた点にあるとしている。また、大阪の商家ではきわめて家族的な経営がなされたため、店主と番頭、手代、丁稚とがきわめてつよい信頼関係で結ばれていたという。

実際に、こうした信頼関係の強さは、井筒梅治郎を講元とする真明組にも顕著に見られた。真明組のつながりから入信した宮田善蔵にとって、教祖のお言葉が真に胸に治ったのは、親神様のご守護を自ら実感するという体験はもとより、この信仰共同体における商人気質の関係性がその素地にあったからだとも考えられる。

2．「儲けること」と「たすけること」

この逸話で興味深いのは、最初は今川聖次郎のお話に感銘しておぢばがえりをした善蔵の入信の過程が、いわば“段階的”に見える点である。一方で、この逸話では、善蔵が実際にどのような悟りによって「成る程と得心した」のか、その具体的な内容については触れられていない。おそらくそこには、彼がそれまでに聞いていた教えと自らの体験を繋ぎ合わせる何らかの悟りがあり、またその悟りは、段階的に深まっていったものと思われる。

自身の胃の病で医者から見放された善蔵は、まずは今川聖次郎による「元の神」である月日親神についての話に感銘を受け、彼の導きでおぢばがえりをするものの、教祖から頂いた「商売人はなあ、高う買うて、安う売るのやで。」というお諭しの意味が分からない。教祖に対し不足を抱き、結局激しい上げ下しを起こすことになるが、ここからは、善蔵がこの段階でも、商売を親神様の守護の世界とは別の領域として捉えていることが窺える。結果的に、そのことが彼自身の身上に表れた。つまりこの出来事は、親神様の思召と人間の商いの営みとが何らかの形で連関しているということを示唆している。この教祖のお諭しの意味について、井筒梅治郎は、問屋と顧客の両者を喜ばせ「自分は薄口銭に満足して通るのが商売の道や」と説いたが、これはまさに、“物を売って儲けを出す”という商いの営みもまた、“人々がお互いに扶（助）け合う”という、親神様によって求められる人間の本来的な営みであるという謂で捉えることができるだろう。

この点は、逸話篇 104「信心はな」においても明らかである。そこでは、教祖から「商売人なら、高う買うて安う売りなはれや。」というお言葉を頂いた冨田伝次郎が、その意味を井筒梅治郎に尋ねたところ、それが「共に栄える理」だと諭されている。真明組の悟りにおいては、商売において問屋も顧客も共に満足させることは、何よりも「人をたすける」ということに直結していた。またこの場合、梅治郎が前提としていたのはまさに「大阪商人」の特徴でもある信頼関係であり、それは彼自身が率いていた真明組の人間関係であった。自らの目先の損得よりも、お互いが扶け合いの精神で商いに勤しむことで、結果的にはすべてが「共に栄える」ことになる。伝次郎にとっても善蔵にとっても、商売をめぐる教祖のお諭しに対する信仰的な悟りが、ここで一段掘り下げられているのである。

3．「儲けること」／「はたらくこと」／「たすけること」

こうした「儲けること」と「たすけること」をめぐる教祖のお諭しについて、さらに掘り下げれば、両者をつなぐ契機として、「はたらくこと」が位置づけられるだろう。逸話篇 197「働く手は」では、「働くというのは、はたはたの者を楽にするから、はたらくと言うのや。」とお聞かせ下されたとある。この逸話の冒頭では、教祖がいつも「世界中、互いに扶け合いするなら、末の案じも危なきもない。（傍点引用者）」と諭され、さらに「陰日向なく働き、人を助けて置くから、秋が来たら襦袢を拵えてやろう、何々してやろう、というようになってくる。こうなってくると、双方たすかる。（傍点引用者）」と語られている。「陰日向なく働き、人を助けて置く」ことが、自ずと「双方たすかる」ことになるとは、「たすける」という能動的な行為によって、「たすかる」という“こと”が立ち上がってくる。「はたらく」ことによって「人をたすける」ことにつながり、それが「双方たすかる」ことにつながっていくというこの道理こそが、教祖によって語られる親神様の思召であろう。そしてこの思召こそが、宮田善蔵が「成る程と得心した」ことだったのではないだろうか。

4．おわりに：「たすけ」の具現化としての「高う買うて、安う売る」

以上のように、商売人としての宮田善蔵の信仰は、教祖から頂いたお言葉の含意を悟ることによって深まっていった。「高う買うて、安う売る」ことを心がけて「はたらく」ことは、視点を変えれば、「人をたすける」ことが「自らがたすかる」ことにつながっているということだろう。教祖が大阪商人に対して特別な眼差しを注がれていたのはもちろん偶然ではなかった。「高う買うて、安う売る」の真意／神意が善蔵の胸に治ったのも、同じ商人で、かつ信仰的な指導も仰いでいた井筒梅治郎から告げられた悟りを介してのことであった。宮田善蔵が井筒梅治郎の言葉によって得た悟りとは、次のお歌で説かれている真のたすけのありようだったのではないだろうか。

わかるよふむねのうちよりしやんせよ
人たすけたらわがみたすかる（三　47）

第 6 講：113「子守歌」

おやさと研究所主任
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

113「子守歌」

教祖は、時々、次のような子守歌をお歌いになっていた、という。

一、弁慶は、有馬の国で育てられ、三つの上は四つ五つ、七つ道具を背に負い、五条の橋にと急がれる。

二、甚二郎兵衛は、手盥持って、釣瓶で水を汲んで、手水使うて、神さん拝んで、シャンシャン。

梶本宗太郎が、二十代の時に、山沢ひさから聞いたものである。

はじめに

教祖がどのような時に、どんな節回しで歌っておられたか。「子守歌」としてお歌いになられたなら、子どもをあやされていたのだろうか。そのような年少の子どもが教祖のところに来た時には、そうした唄を唄われたのだろうか。ふとしたときにお一人で口ずさまれていたのだろうか。ここでは、上村福太郎が残した『教祖の御姿を偲ぶ　改訂新版』も頼りに、逸話に伝えられたその教祖の姿を想ってみた。

113「子守歌」に歌われているもの

「一」の弁慶の七つ道具と弁慶が有馬で育ったことが唄われる。有馬には須磨寺や書写山圓教寺に縁のものが残されていて、弁慶は圓教寺で 7 歳～ 17 歳の 10 年間、修行したとされている。「二」では「甚二郎兵衛」という人が「神参り」するときの手順を「シャンシャン」と陽気に唄っている。こうした歌詞が天理界隈で唄われていたかどうかについて不明であるが、天理には「弁慶のもっこ塚」があったと伝えられている。弁慶は庶民の間でもよく知られていたということだろう。ここでは、教祖がどんなことを歌われたかというよりは、そうした「ご様子」を山沢ひさは懐かしさとともに、梶本に伝えたのだと思う。38「東山から」も、教祖がよく口ずさんでおられた歌を伝え、教祖のご様子を垣間見ることができる。

盆踊りと正月

『教祖の御姿を偲ぶ　改訂新版』の中で著者の上村福太郎は、教祖を想うことは「懐かしい」ことと綴り、上島かつの三島神社の「盆踊り」の思い出が明治 14、15 年の頃のことと思われるとした上で、この盆踊りを教祖と関連して考えるのも「懐かしいことのひとつ」と誌す。明治 12 年に小二階ができ、13 年には鳴物を入れての「おつとめ」の急き込みがあり、そのために秀司は金剛山地福寺に赴き、「転輪王講社」を開筵した。16 年には村人の懇願を受け「雨乞づとめ」を盆の 2 日前に行い、その成果のために勾引、17 年の奈良監獄署へのご苦労も盆の頃のことであった。そうした人々の楽しみの夜の教祖は、「思うだけでも懐かしい」と言う。上村は「あらゆる圧迫の中を、世界の子供たすけたい一条の教祖の御心は、赤衣の色と一つになっていよいよますます燃えつづけられるのであった。」と述べ、また正月の風景を想起し、「雪に埋もれたお屋敷の元朝、赤衣を召された地上の親神教祖を中心に、当時のあたたかい情景をしのばして頂くさえ懐かしいきわみである。」と綴っている。

梶本宗太郎

梶本宗太郎は、梶本松治郎（初代真柱の兄）の子で、教祖の曾孫にあたる。山沢ひさは、おばである。逸話篇 192「トンビトート」、193「早よう一人で」も梶本宗太郎の思い出である。

「192 トンビトート」

明治十九年頃、梶本宗太郎が、七つ頃の話。教祖が、蜜柑を下さった。蜜柑の一袋の筋を取って、背中の方から指を入れて、

「トンビトート、カラスカーカー。」

と、仰っしゃって、

「指を出しや。」

と、仰せられ、指を出すと、その上へ載せて下さる。それを、喜んで頂いた。

又、蜜柑の袋をもろうて、こっちも真似して、指にさして、教祖のところへヒヨーッと持って行くと、教祖は、それを召し上がって下さった。

192「トンビトート」は、113「子守歌」や 38「東山から」と似たような雰囲気が感じられる。子どもに対する優しい心、子どもと芯から楽しそうに過ごされている姿が目に浮かぶ。19「子供が羽根を」は、教祖が、「正月、一つや、二つやと、子供が羽根をつくようなものや。」と言って、「おつとめ」を教えられた様子を伝えている。数え歌のように誰にでも分かりやすく、覚えやすいようにと教授されたのは、そうした唄を好まれたのかも知れない。

教祖と子ども

梶本宗太郎が伝える 193「早よう一人で」の逸話には、「教祖にお菓子を頂いて、……子供同士遊びながら食べて、なくなったら、又、教祖の所へ走って行って、手を出すと、下さる。食べてしもうて、なくなると、又、走って行く。どうで、『お祖母ちゃん、又おくれ。』とでも言うたのであろう。三遍も四遍も行ったように思う。それでも、『今、やったやないか。』というようなことは、一度も仰せにならぬ。又、うるさいから一度にやろう、というのでもない。食べるだけ、食べるだけずつ下さった。」と教祖の姿が描かれている。同様の話は上村の著書の中にも収められている。中山もとは「……御母堂様と私と二人して、……『おばあさん、何どください』と申しました。すると教祖は右手をひたいのあたりに弓型におかざしになって、『だれどや。あ、玉さんらやな』とにこにこ仰せになると、ご自分で袋棚をおあけになって掴んできてくださった……たべてしまうと、もうまたすぐに、『おばあさん、何どください』と二人して教祖のおそばにまいるのです。そうすると教祖は、今やったばかりやないか、と一回もおっしゃったことがなく、『よし、よし』と申されて、またご自身で立っていって掴んできてくださいました。」と語っている。また、宮本ていは子どもの頃に具合が悪くなると教祖を訪ね、教祖が「にこにことなされながら、『どれどれ』とおっしゃって、私の手なら手を御自分のお手にお取りになって息をかけて下さいました」と語っている。こうした教祖の子どもへの接し方からすると、教祖は子どもを芯から愛おしく、対応も丁寧だったことがわかる。

おわりに

教祖がどのような声でどのような節回しで、そしてどのようなテンポでお唄を歌われたのだろう、そのお歌を聴いてみたいという気持ちが今も残ったままである。同時に、経済的に困窮され、社会的な圧迫の中で、終始一貫として「おやさま」（親さま）であったことを確認したように思う。教祖にとっては、すべての人々が「可愛い子ども」であるから、それは当然のことだとも言えるが、教祖「ひながた」のありようが、「子ども」の思い出を通し、「逸話」として生きている。上村の「懐かしい」という叙述は、教祖が身近にいてくださるということを語っているように思われる。

2023 年度おやさと研究所　特別講座「教学と現代」

社会の中で問われる宗教の役割と使命
―格差・ジェンダー、そして宗教の公共性―

近年、社会的格差の問題やジェンダーの多様性などが喧伝されるようになりました。こうした問題に対して、宗教はどのように取り組めば良いのでしょうか。宗教学においてそれは宗教の公共性をめぐる議論として取り上げられ、そこでは現代において果すべき宗教の役割や使命が問われています。そこで、2023 年度の特別講座「教学と現代」では、天理総合人間学研究室と天理ジェンダー・女性学研究室との共催により、「社会の中で問われる宗教の役割と使命―格差・ジェンダー、そして宗教の公共性―」をテーマに開催することになりました。

講師には、『格差社会の宗教文化―「民衆」宗教の可能性を再考する』（風媒社、2022 年）の著作があり、宗教文化研究の立場から宗教の新たな社会的可能性を見直す試みをされている熊田一雄・愛知学院大学准教授をお招きして、現代日本社会で宗教がどのような役割を果しているのか、また天理教が社会のためにどのような貢献ができるのかについて、講演をいただくことになりました。これに対して、おやさと研究所研究員が、それぞれジェンダー論の視点及び宗教の公共性の視点を踏まえ、天理教実践教学の立場から応答をいたします。

ご関心のある方々の積極的なご参加を歓迎いたします。来聴無料、事前予約は不要です。

【開催日時】2024 年 3 月 25 日（月）14：00 ～ 16：20
【演題】現代日本社会と宗教の役割
【講師】熊田一雄（愛知学院大学准教授）
【パネリスト】堀内みどり／澤井　真（おやさと研究所）
【会場】天理大学研究棟第 1 会議室

2023 年度公開教学講座のご案内
― 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（9）―

2023 年度の公開教学講座は、オンラインで配信しています。是非ご視聴ください。

第 1 回 6 月　井上昭洋所長　167 話「人救けたら」
第 2 回 7 月　尾上貴行研究員　168 話「船遊び」
第 3 回 9 月　金子昭研究員　122 話「理さえあるならば」
第 4 回 10 月　澤井治郎研究員　146 話「御苦労さん」
第 5 回 11 月　島田勝巳研究員　165 話「高う買うて」
第 6 回 1 月　堀内みどり主任　113 話「子守歌」

2024 年度公開教学講座のご案内
― 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（10）―

2024 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

第 1 回 6 月　井上昭洋所長　172 話「前生のさんげ」
第 2 回 7 月　澤井真研究員　114 話「よう苦労して来た」
第 3 回 9 月　岡田正彦研究員　135 話「皆丸い心で」
第 4 回 10 月　八木三郎研究員　36 話「定めた心」
第 5 回 11 月　森洋明研究員　85 話「子供には重荷」
第 6 回 1 月　調整中　144 話「天に届く理」

グローカル天理
第 25 巻　第 2 号　（通巻 290 号）
2024 年（令和 6 年）2 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　井上昭洋
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan